

一参加者から見た IPCC プロセス

住 明正(東京大学 IR3S/TIGS)

筆者は、IPCC の第1作業部会第4次報告書の作成に、Lead Authorとして参加したので、その経験を元に、IPCC の作業プロセスを解説してみたい。

IPCC は、1988 年に発足した、WMO と UNEP によって組織されている国連の会議である。したがって、IPCC の会議の運営は、国連ルールに従って行われる。これは実には大変で、会議の時間は、午前3時間、午後3時間に限られているようである(同時通訳者の勤務条件とのことらしい)。この中で、大筋(議長などの人事、案文の採択など)が決められる。日本政府としても、外務省を軸に対処方針が決められて対応しているのであろう(ここには、経済産業省、環境省など主要な役所の人が出てゆく)。

研究者は、報告書の発行が決まり、作業部会の共同議長が決まり、その目次案が IPCC 総会で承認されてから、各章の CLA (Coordinate Lead Author)、LA (Lead Author)、RA (Review Author) が決められる。このため、各国は、候補者を IPCC 事務局に提出しておく。この決定プロセスは、よく知らないが、議長など数人のボス交で決まるのであろう。

CLA, LA, RA が決まれば、通常の、作業に入る。すなわち、xx 年9月の第1回 LA 会議、(xx+1)年3月の第2回 LA 会議、(xx+1)年12月の第3回会議、そして、(xx+2)年7月の第4回会議を経て、本文が11月ごろに確定し、xx+3年2月に公表される。この間、peer review、governmental review を経て最終版が決まる。

作業は、結構大変である。著者として参加すると、報告書の各節を割り当てられる。しかし、自分の専門範囲を大きく超えている場合も多いので、他の人の助けを借りることになる(このような人が、CA (Cooperated Author)と呼ばれる人である)。従って、人脈が広いことが重要となる。

最近では、IPCC の報告書に引用されることが status になりつつあり、引用を求める動きは強いものがある。しかし、多くは、最新の結果であるために、結局、LA あたりの認識にかかってくることになる。その意味では、国際会議などで発表し、論文を書いて、世界に印象を与えてゆく必要がある。とにかく、LA をとることが、引用などを増やすには非常に大事である。